

# 高・大・院・社会人連携による古典文学ワークショップの試み ——日本文学アクティブラーニング研究会主催 第5回ワークショップ 「剣の謎にイドむ—剣クロニクルの編纂」報告——

平野 多恵・兼岡 理恵

## はじめに

古典文学は敬遠されがちだ。高校や大学の授業でも、難しい、文法が嫌い、身近に感じられない、何の役に立つのかわからないといった声が聞こえてくる。

こうした声を聴いて、古典のおもしろさや奥深さを実感しつつ学ぶ場をつくりたい、古典研究やその学びを社会に役立てたいと考えたメンバーが集まって、2013年から日本文学アクティブラーニング研究会がはじまった。筆者の兼岡・平野もそのメンバーである。

本稿は、この2名が企画し、ファシリテーターをつとめた第5回目のワークショップ（以下、WS）の実践報告である。

## 1. 研究会の概要

研究会では2015年から年に一度、古典文学を素材とした教育WSを開催している<sup>1</sup>。WSの企画・運営は駒澤大学（中嶋真也）・昭和女子大学（青木幸子）・成蹊大学（平野多恵）・中央大学（吉野朋美）・千葉大学（兼岡理恵）・東京大学（佐藤至子）・東京女子大学（中野貴文）・法政大学（小林ふみ子）で日本古典文学や教育学を専門とする教員が協働しておこなっている。2019年4月から科学研究費補助金 基盤研究Cの研究課題「高大連携による古典文学の探究型授業の教材作成と教育モデル構築の実践的研究」（研究代表者 吉野朋美、課題番号 19K00530）に採択され、これまでの活動をさらに発展させつつある。

研究会がこれまで主催してきたWSのテーマ・開催年月日・開催場所・参加人数を以下にあげる。

### 第1回「和歌を演じる—伊勢物語」

2015年3月27日、法政大学、参加者27名。

伊勢物語の和歌をもとに物語を作り演劇化<sup>2</sup>

第2回「絵と文の相互作用—江戸の「見立て」を楽しむ」

2016年8月10日、成蹊大学、参加者33名。

江戸の絵本で「見立て」の概念を学び、共同で見立て絵を作成。

第3回「和歌解釈の多様性—歌占巫子養成講座」

2017年9月17日、駒澤大学、参加者32名。

百人一首を素材に和歌解釈の多様性を学び占いを作成<sup>3</sup>。

第4回「歌の表記と修辞—今日からあなたも万葉歌人」

2018年8月7日、法政大学、参加者31名。

万葉集の表記や表現を学び、枕詞を創作したうえで和歌を詠む。

第5回「剣の謎にイドむ—剣クロニクルの編纂」

2019年8月7日、法政大学、参加者38名。

参加者は、第1回目は大学生のみであったが、第2回目からは高校の教員と生徒、大学院生、研究会メンバー以外の大学教員、編集者なども加わった。本研究会で企画してきたWSは、古典文学や古典教育に関心のある高校生と大学生、教員志望の大学院生、高校と大学の現役教員、出版社などの企業につとめる社会人といった幅広い年齢層の参加者が一堂に会して同じ題材に取り組んで学びを共有するものであり、高大連携を越えた高・大・院・社会人連携による前例のない取り組みといえる。

## 2. 第5回ワークショップの紹介

第5回目は、2019年8月に法政大学で開催した。今回の参加者は合計38名で、その内訳は高校生6名、大学生17名、大学院生4名、高校教諭4名、大学教員3名、社会人4人であった。

今回のWSは三種の神器の一つである「草薙の剣」の神話をテーマとした。WSの3ヶ月前に天皇の代替わりがあり、新天皇の即位にあたって「剣璽等承継の儀」がおこなわれた。草薙の剣が継承された場をニュースで目にした参加者も多い。天皇に継承された「剣」を題材として現在のわたしたちと古典の世界がつながる、またとない機会と考え、このようなテーマを設定した。

草薙の剣のルーツは、古事記や日本書紀に収められるスサノオノミコトのヤマタノオロチ退治の神話である。この神話を出発点にして古典文学に描かれた「剣」の行方を追いかけてながら、時代や筆者の立場により神話の捉え方が異なることを学ぶことをねらいとした。さらには剣をめぐる歴史の空白を埋める物語を創作することで新たな物語の生まれる仕組みを体験的に学べるよう、もくろんだ。

そのためのテーマが「剣の謎にイドむー剣クロニクルの編纂」である。プログラムは以下の流れでおこなった。

#### 午前

- 1 アイスブレイク①
- 2 プロローグー質問づくり
- 3 剣のものがたりを知るー古代編

#### 午後

- 4 アイスブレイク②
- 5 剣のものがたりを知るー中世編
- 6 剣の謎にイドむーものがたりを作る
- 7 エピローグー巻物づくり
- 8 れいわ剣大賞 結果発表
- 9 ふりかえり

### 1 アイスブレイク① (担当：中野貴文)

アクティブラーニング型授業では参加者がうちとけて話し合える場づくりが重要である。ふだんの授業はもちろん、さまざまな立場のメンバーが初めて顔をあわせる場合は、リラックスした雰囲気により重要性を増す。そのためにおこなうのが、参加者の緊張をときほぐすアイスブレイクの活動である。1アイスブレイク①は、軽く体を動かしながら、これからのグループワークに向けて参加者の心と体がひらかれるよう、うながした。

### 2 プロローグ (担当：平野)

今回のテーマに関連して「質問づくり」をおこなった。「令和元年5月1日、皇太子徳仁親王は草薙の剣を継承し、新天皇として即位しました。」という一文と、新天皇が「剣璽等承継の儀」で草薙の剣を継承している写真をスライドに掲げ、そこから質問をつくっていくというワークである。4人グループで、できるだけ多くの質問をつくり、それをブラッシュアップして重要だと思う質問を3つに絞りこんでいく<sup>4</sup>。上記の一文に関連して、たくさんの質問を出しあって検討することで、これから向きあう剣の神話への興味がおのずと高まっていくことになる。

### 3 剣のものがたりを知るー古代編 (担当：兼岡)

ワークと小レクチャーである。剣が発見されてから熱田神宮にまつられるまでを以下の①～④のワークシートに分けて示し、ジグソー法<sup>5</sup>で内容を理解した。具体的には、4人グループでそれぞれ①～④、いずれかのワークシートを担当し、メンバーに説明するため各自で与えられた質問について考えて記入した。

①八岐大蛇の尾から剣発見 (『日本書紀』)

- ②天孫降臨（同上）
- ③草薙の剣の由来（同上）
- ④熱田神宮に置かれた由来（「尾張国風土記逸文」）

個人ワークの後は、同じ番号を担当した人が集まって内容を確認し（エキスパート活動）、その後、自分のグループに戻って①～④の内容の理解を共有した。

神話の記述に慣れない人にとって、剣がいつ、どこにあったかを把握するのは、なかなかやっかいである。それを整理するため、ワークシートを用いて①～④の内容を年表（クロニクル）としてまとめた。年表をつくるためには、主語や述語、5W1Hをできるだけ明らかにして簡潔に書く力が養われる。

年表の作成は文学研究の基本的な作業でもある。年表にすることで、それまで見えなかったつながりに気づき、新たな知見が得られることは多い。研究の基本的技術を参加者に経験してもらうことも本ワークのねらいの一つである。

#### 4 アイスブレイク②（担当：中野）

午後のグループの交流をうながすため、口頭で説明を聞いたものを絵に描く活動をおこなった。グループの1人だけが課題の絵を見て、他のメンバーに口頭で説明する。メンバーはその説明にしたがって制限時間内に絵を描く。描き終わった絵を一斉に見せあうと、同じ絵を見て説明しているのに、できあがった絵はそれぞれ違っている。今回の絵は深海魚「リュウグウノツカイ」で、もとの造形のユニークさもあり、絵に個性が出て盛り上がった。「リュウグウ（竜宮）」は午後のワークのテーマとも関連する。

#### 5 剣のものがたりを知る—中世編（担当：平野）

『平家物語』『先帝身投』の場面を読み、安徳天皇とともに壇ノ浦に沈んだ剣が、その後、どうなったかを考えるワークである。古代から継承された草薙の剣が中世にどのように解釈され、変容していったかについて、A『平家物語』剣、B慈円『愚管抄』、C北畠親房『神皇正統記』の記述を手がかりに考えた。古代編と同様、ジグソー法によるグループワークをおこなった。3人組でA・B・Cをそれぞれ1人1つずつ担当し、本文を読んで各自が担当のワークシートを記入した後、グループで内容を共有し、理解を深める。安徳天皇が剣とともに沈んだ理由を語る『平家物語』(A)、貴族と武士の協調を願って武士が剣の代わりとなると考えた慈円(B)、南朝の正統性を説く立場から壇ノ浦に沈んだ剣は偽物であったという北畠親房(C)。これら3つの異なる立場による剣の解釈の違いを理解するワークである。

そして、3古代編と同様、内容を理解した後、年表ワークシートに文章を記入した。年表にすることで、それぞれの時代や立場によって安徳天皇とともに海に沈んだ「剣」に対する解釈が異なるのを理解する一助とした。

このワークは、どのような立場の人が、いかなる意図や論理で物語を作ったかを考える視点を獲得し、歴史がどのように作られるのかを考えるきっかけになればと考えて構想したものである。神

話がさまざまに解釈された事実を知ること、神話を相対化する視点や神話が人を動かしてきた歴史を客観的に見る目を持つてほしいというねらいもある。どのようなテキスト・言説にも立場性があるという学びは、古典文学に限らない。フェイクニュースや政治的な発言など現代にも通じるものとして重要だろう。

## 6 剣の謎にイドむ一ものがたりを作る (担当: 兼岡・平野)

これまでの学びをふまえ、自分たちで歴史の空白を埋める新たな剣のものがたりを作る活動である。剣は安徳天皇とともに壇ノ浦に沈み、その後も見つかることはなかった。その剣の行方や存在をめぐって、さまざまな解釈がおこなわれたことはワーク6で理解している。プロローグでは新天皇が剣を継承した事実を確認した。令和元年(2019)5月に新天皇が継承した剣と、寿永4年(1185)、安徳天皇とともに沈んだ剣は、いったいどのような関係があるのだろうか。本WSのまとめとなるワークは、この剣をめぐる「謎」を解き明かす物語、剣にまつわる歴史について、約840年の空白をうめる物語を創作し、全員の前で発表するというプレゼンテーション課題である。

まず各自が4コマでストーリー展開を考え、その後、グループで各自の考えた物語を共有し、ブラッシュアップしていく。発表は、1グループ2分(寸劇など、全員が参加する口頭での表現を主とする)、発表の後で1分の説明を加えることとした。構想する時間は20分と短かったが、全グループが時間内に、個性ある物語を創り上げることができた。

## 7 エピローグ (担当: 小林ふみ子・兼岡)

3古代編・5中世編の活動で作成した年表をつなぎ合わせ、台紙に貼って巻き、卷子本、いわゆる巻物風に仕立てた。『日本書紀』や勅撰和歌集のような国を代表するような格式の高い書物は、古来、卷子本の形で保存されてきた。書物の内容によって、その形もふさわしいものが選ばれることを擬似的にでも体験してもらえたらという思いから考案したものである。

## 8 れいわ剣大賞 結果発表

6で創作した物語のプレゼンテーションに投票を行い、もっとも多くの票をあつめた上位3グループを表彰した。

## 9 ふりかえり

本WSの学びを今後活かすためにふりかえりをおこなった。各自でふりかえりシートを記入した後、全体でシェアした。ふりかえりの項目はORID Questions<sup>6</sup>のフレームワークをもちいて次の4点とした。

- ①今日のWSで、もっとも印象に残ったことはなんですか。
- ②そのとき、あなたはどのように感じましたか。
- ③そのことから、なにを学びましたか。
- ④それを今後役に立てるとしたら、どのように役に立てられるでしょうか。

アンケートを見ると、アイスブレイク・質問づくり・年表づくり・物語づくりと、ほぼすべての内容が印象深いものとして書かれていた。とくに最後の物語づくりとプレゼンテーションはひとき

わ充実感があつたようで、「皆が色々な考えを持ち共有することで、よりよい案ができる」「インプットをふまえたアウトプットが大事」など、多くの学生が言及していた。グループのメンバーと話し合いながら1つのものを短い時間で創り上げたことが良い経験になったことがうかがえる。

質問づくりに関連して「日常的な事柄も疑問を持つことで大きな学びにつながる」ことに気付いたという意見もあった。自分の疑問を掘り下げていくことで深い水脈に行きあたるとするのは研究や教育の目指すところだ。

一方、高校1年生から大学院生や教員までと参加者の知識レベルがかなり異なるなかでメンバーのグループわけをどうするか、ワークショップを効果的に行うにはどうしたらよいか、限られた時間で行う高校・大学の授業で、本ワークショップのような試みをどのように取り入れるか等の課題も指摘された。

## おわりに

本研究会のメンバーで採択された科研費の研究目的は、教育と研究を実質的に連携し、古典の学びを通して新たな価値を創造する探究型の教育手法を開発することである。これは生徒・学生が日本の古典文学の魅力を自ら発見するディープ・アクティブラーニング型の教育方法の開発でもある。そのためには、質問で関心を高め、自らの関心から主体的に知識をインプットし、人に伝えるためにアウトプットする、その実践的な繰り返しの場を日頃の授業で提供することが重要なのではないだろうか。授業の中で、意見の異なる他者と協働しながら、よりよいものを創り上げようとする経験を積むことは、大きな成長につながるだろう。

本WSは、学習者（高校生・大学生・大学院生）と教授者（高校・大学教員）ならびに企業に勤める社会人が同じ題材で学び合い、多様な視座を獲得しようとする試みでもある。さまざまな参加者が対等な立場で同じ課題に取り組むことで、これまでにない気付きや多様な学びももたらされるだろう。WSで得られた課題を日常の授業にフィードバックして教材を開発し、教育方法を深化させていきたい。

## 注

- <sup>1</sup> この会の発足と第1回目の概要は「古典文学をアクティブ・ラーニングでまなぶ 和歌を演じるワークショップ」『リポート笠間』58号（2015年6月）、5～8頁を参照。笠間書院Blogにも掲載。[http://kasamashoin.jp/2015/06/58\\_7.html](http://kasamashoin.jp/2015/06/58_7.html)（2019年12月15日最終閲覧）。
- <sup>2</sup> ワークショップの概要は注1参考文献およびBlogを参照。
- <sup>3</sup> 平野多恵「歌占巫子養成講座—多様性をまなぶワークショップ—」『日本文学』2017年11月号。本WSの内容は、一般向けのWSとしてアレンジして、「未来のマナビフェス2019—2030年の学びをデザインする」（於東京工科大学蒲田キャンパス、2019年8月22日）において吉野朋美・佐藤透・平野多恵「新たな高大連携への

模索～古典文学のワークショップを通して～」として実施・報告した。

- <sup>4</sup> ダン ロスステイン・ルース サンタナ『たった一つを変えるだけ クラスも教師も自立する「質問づくり」』（新評論、2015）に基づく活動である。
- <sup>5</sup> ジグソー法は学習者同士が協力しあいながら進める学習方法の一つで、もとはアメリカの社会心理学者エリオット・アロンソン（Elliot Aronson）が提唱した。アクティブラーニング型授業で多く用いられており、日本では東京大学 大学発教育支援コンソーシアム推進機構（CoREF）の三宅なほみを中心となって開発した「知識構成型ジグソー法」も広がっている。東京大学 CoREF「知識構成型ジグソー法」<https://coref.u-tokyo.ac.jp/archives/5515>（2020年1月4日最終閲覧）。
- <sup>6</sup> ORIDのOはObjective（事実）、RはReflective（感情）、IはIntepretive（解釈）、Decisional（決定）の頭文字。カナダのNPO（Institute of Cultural Affairs）で開発されたふりかえりの手法で、経験した事実に基づき、感情をふまえたうえで、その事実を解釈し、学びにつなげる。Brian Stanfield, *The Art of Focused Conversation: 100 Ways to Access Group Wisdom in the Workplace*, NEW SOCIETY PUBLISHERS, The Canadian Institute OF Affairs, 2011, p21

#### 〔付記〕

本WSの内容については清水由美子氏に種々ご教示たまわり、WS終了後、清水氏をはじめ、菅野美香氏、佐藤透氏、鈴木敏幸氏、高池亜友美氏、西内友美氏、水谷彩氏、溝上慎一氏、渡部泰明氏から本WSに関する有益なフィードバックをいただいた。この場を借りて深く感謝申し上げます。本稿は科学研究費補助金 基盤研究C「高大連携による古典文学の探究型授業の教材作成と教育モデル構築の実践的研究」（課題番号19K00530）および2018年度成蹊大学長期研修の成果の一部である。